スポーツ人類學研究
第20号：1 - 30. 2018

# [特集]

# 信仰と身体

## 特集に寄せて

シンポジウム・ファシリテーター
石井浩一
愛媛大学教育学部

本特集「信仰と身体」は，2018年3月，愛媛大学において開催された日本スポーツ人類学会19回学会大会シンポジウム「信仰と身体」の発表，質疑応答を含めてまとめたものである。以下に，シンポジウム趣旨を再現している。

◇

本シンポジウムでは，「身体実践」を通して得られる価値を検証するものである。テーマとしては「信仰空間」に注目し，①四国遍路と身体，②西大寺観音院における会陽（えよう）と身体，③出羽六十里越街道と身体という，三つのテーマを取り上げてそれらに関して身体実践の報告が行われる。

「① 四国遍路と身体」は，本大会が行われる四国で受け継がれ，そして信仰実践の形を現在でも持っている四国遍路に関するものである。本事例報告では，特に八十八箇所を巡るという苦行とその実践，そこに求められ達成される価値についての報告がなされる。

「② 西大寺会陽と身体」であるが，岡山市に位置する西大寺観音院では毎年2月に「会陽」という行事が行われている。会陽とは密教系の寺院で行われる春迎えの行事で，結願日には「宝木（しんぎ）」と呼ばれる一対二本の神木を大勢の裸衆が奪い合う。この行事は最近あまり見られなくなったが，かつては瀬戸内沿岸地域に散見されたものであり，地域文化の一つとも言える。本事例報告では参加者たちが精進潔斎し得られる身体観と求める価値に関する報告が行われる。

「③ 六十里越街道と身体」では，山形県庄内地方と内陸を結ぶ六十里越街道に関する研究報告がなされる。この道は1200年以上の昔に開かれた険しい山道であり，山岳信仰が盛んだった室町～江戸時代には，「ご神体」を求めて，東北や関東各地から訪れる参詣者たちで賑わったと言われている。一方で，明治以降，新道の開通や価値観の変化に伴い，歴史の表舞台から退いた。しかし，六十里越街道には今日でも数多くの史跡が存在し，「信仰」と「自然」「歴史」を体験できる観光スポットとして注目されている。本事例報告では観光化と信仰実践の価値の相克に関して報告が行

われる。

本シンポジウムでは①②③の事例報告にてそれぞれ紹介された「身体」とその扱われ方をベースに，信仰空間において身体がメディアとして如何に利用され，人と神仏，また社会と結びつけているのかを検証する。さらに，それら議論をベースに，視点を文化としてのスポーツにおける「身体」についても拡げ，民族，国際の如何を問わず，スポーツ活動の根源として存在しつづけてきた「身体」とその「実践」を通して得られる文化的価値を検証するものとなる。

◇

**石井**：テーマとしては，信仰と身体ということで，まず一つ目に「四国遍路と身体」，二つ目に「西大寺観音院における会陽と身体」，そして三つ目に「出羽六十里越街道と身体」という三つのテーマを取り上げて，それらに関して身体実践の報告が行われます。そして，後ほどパネリストの先生方三人に事例報告をしていただくのですが，それぞれ紹介された身体とその扱われ方をベースに，信仰空間において身体がメディアとして如何に利用され，人と神仏，また社会と結びつけているのかということを検証します。さらに，それらの議論をベースに，視点を文化としてのスポーツにおける「身体」についても拡げて，民族，国際の如何を問わず，スポーツ活動の根拠として存在しつづけてきた「身体」とその「実践」を通して得られる文化的価値を検証するものとなります。それでは，パネリストのプロフィールと話していただく概要について説明させていただきます。

まず，寺内浩先生でございます。寺内先生は，現在，愛媛大学法文学部の教授で，法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター長も兼任されております。専門は日本史で，著書に『受領制の研究』，論文は四国遍路に関する物のほか多数の論文がございます。寺内先生には，四国遍路という身体実践に求められる価値，達成される価値についてお話していただきます。プログラム抄録集の写真は，これは『四国遍路道指南（みちしるべ）』という江戸時代の四国遍路のガイドブックからとっております。

それでは次に，瀬戸邦弘先生です。専門はスポーツ人類学です。現在，鳥取大学の教育センターの准教授をされております。沖縄の綱引き，それから応援団，まさに今日話していただく会陽など，非常に広範囲にフィールドを駆け巡っておられるということで，本日は岡山県岡山市西大寺観音院で行われる会陽への参加者が神木争奪戦への参加者が，精進潔斎して得られる身体観と求める価値について話していただきます。

続きまして，鄭稼棋先生でございます。現在，鹿屋体育大学の特任講師をされております。中国少数民族伝統運動会と民族問題の研究を経て，ここ数年，出羽三山六十里越街道研究に着手されているということです。観光化と信仰の実践との相克ということについて話していただくことになると思います。

まず，シンポジウムの進め方ですが，お一人ずつこちらの演題で20分ほど話していただきます。三人のパネリストの発表が終わってから，討論という形で進めさせていただきたいと思います。まず，寺内浩先生からお話をお願いします。

# 四国遍路と身体

寺内　浩
愛媛大学
法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター長

はじめまして，愛媛大学法文学部の寺内です。全国からたくさんの方に来ていただきありがとうございます。四国で開催されるということで，四国遍路を取り上げていただきました。今日はその話をさせていただきます。

今日はテーマにありますように，四国遍路を現代的な修行として捉える観点から，1200 kmの道のりを歩けば（だいたい 50 ～ 60 日かかります），どういう心身の変化がおきるのかについて話をします。

最初に四国遍路の歴史について簡単に話しておきます。一般の日本の歴史と違い，四国遍路の歴史というのは，ごく簡単でして大きく三つの時期に分けることができます。一つめの時期は，四国遍路が始まってから戦国時代まで，だいたい 8 世紀から 16 世紀の時期です。このころの四国遍路は，まだ 88 か所をまわるというものではなく，僧侶や山伏，すなわちプロの宗教者が修行として（山伏が山のなかを駆け巡るというイメージです），宗教的な能力（おまじないや加持祈祷の能力）を得るために行っていました。四国遍路には，こうした修行としての性格が本来的にあり，それがある意味では現在まで続いています。

この修行としての四国遍路は，江戸時代になると大きく変化します。僧侶や山伏などのプロの宗教者ではなく，一般の人びとが四国遍路に出るようになります。また，88 の札所が選ばれて，今と同じように 88 か所を回るという四国遍路ができあがります。これが江戸時代になってからの変化です。故に，今のような 88 の札所を一般の人々

図 1 『四国遍路道指南（みちしるべ）』（江戸時代の四国遍路ガイドブック）より転載

が巡るという四国遍路は，だいたい 400 年くらい前にできたといえます。このころの四国遍路の目的は，病気治癒あるいは先祖・死者の供養といった宗教的なご利益や願いにあります。そういう形の四国遍路が基本的には明治，大正から戦後しばらくの時期まで続きます。そして四国は鉄道やその他の交通網の整備が遅れ，かつ多くの札所が山中にあるため，戦後しばらくまで四国遍路は歩いてまわるのが一般的でした。

ところが，昭和の 40 年代ころから四国遍路はまた大きく変貌します。何が変わったかというと，とにかく歩かなくなったということです。昭

和40年代からモータリゼーションが進み，バスや乗用車などの車でまわるという人が圧倒的に増えます。我々の調査によると，現代は85％の人びとが車，バスでまわっています。歩いてまわる人は1割いるかいないかです。これが昭和40年代以降の現代の四国遍路の実態です。ただ注意しないといけないのは，これほど便利な世の中になった，つまり車でまわろうと思えばいくらでもまわれるのに，いまだに約1割の人は歩いてまわっています。これが，ある意味おもしろいところです。

今でも続いている巡礼といえば，四国88か所と並んで，西国33か所があります。これも距離は約1100kmですから，四国遍路と同じくらいの長さがあるわけですが，今の西国33か所は歩いてまわる人はほぼゼロです。ところが同じ長距離の巡礼でありながら，四国遍路は約1割の人が歩いています。今は年間だいたい15万人から20万人の人が四国遍路をしているといいますから，その1割程度とすると1万5千人から2万人くらいの人が，今でも歩いて1200㎞をまわっていることになります。ここがおもしろいところかと思います。

次に現代の四国遍路の目的ですが，かつては宗教的なご利益や願い，特に病気を治したいという願望が強かったわけですが，今は神仏にお願いしても病気が治るというような時代ではありませんから，目的もそういう宗教的なものは少なくなっています。反対に増えているのが健康，観光，自分を見つめ直す，チャレンジなどの非宗教的な目的です。もちろん今でも家族がなくなったりすると，供養のためにまわるという人がいますから，宗教的な目的が全くなくなったわけではありませんが，現代の四国遍路は宗教色が薄れているといえます。

こういう歴史があるということを前提に本題の方に入っていきたいと思います。では，1200㎞を歩くとどのような心身の変化が起きるのか，それを実証するデータとして使うのが歩き遍路の体験記です。これは非常におもしろいことなのですが，1200㎞を歩いた人のうちのかなりの数の人が自分の歩いた体験を記録し，それを本として出版したり，あるいはネットに載せたりしています。愛媛県でいえば，県立図書館に行くと一般の方が書いた遍路体験記がずらりと並んでいます。あるいは，ネットで四国遍路体験記で検索をかけると，非常にたくさん出てきます。興味深いのは書いている内容がみんな似通っている，だいたい同じようなことを皆さんが書いていることです。つまり，1200㎞を歩くとだいたいみな同じような経験をすると言い換えることができます。それが遍路体験記の特徴です。

今日使わせていただく遍路体験記ですが，一つは岩波新書として出ている辰濃和男さんの『四国遍路』です。辰濃さんは，朝日新聞の天声人語を長い間にわたって書かれた，ある意味ではプロの文章家です。一番硬派の遍路体験記ともいえます。もう一つ取り上げるのが，ご存じの方がいるかもしれませんが，四元奈生美さんという，派手やかなユニフォームで話題になったプロの卓球選手の遍路体験記です。この四元さんが，NHKの番組で四国遍路を歩き，その体験を『四国遍路に行ってきマッシュ！』という名前の本で出しています。これは一種のタレント本みたいなものですが，さっきの辰濃さんとは逆に非常に柔らかい内容です。ところが，両者をみていくと，1200㎞を歩くとどういう心身の変化が起きるのかについて同じようなことがいっぱい書かれています。

両者ともに書かれてあることの一つめは，四国遍路というものは歩くという単純な行為の繰り返しだという，あたりまえのことをあたりまえのように認識したということです。たとえば，四元さんは，「どんなに悩んでも，いつまで考えても，結局は歩くしかないのです。」と書いています。

一方，辰濃さんは，「お遍路の基本は，二本の足を交互に動かして前に進むことだ。…中略…「歩く」ということを日々の営みの中核にすえることから，お遍路ははじまる。」と書いています。

二つめとして，両者とも四国遍路をシンプルな生活としています。四元さんは「複雑な日常と比べ，この旅はとてもシンプルです。」と書いています。まさに歩くしかない，そういう生活が50日，60日続くということですね。辰濃さんは，「お遍路は，日常的なものを絶つ，あるいは捨てることからはじまる。」というように，いろいろなことがある日常とは違い，そういうものはすべて捨ててひたすら歩くのだ，そういうシンプルな生活が遍路だということを書いています。

三つめは，そういうただ歩くという単純な生活を何日も続け200㎞，300㎞歩いてだんだん疲れがたまると，頭が空っぽになり逆に体に開放感が溢れてくる。そして，人間が本来持っている力が目覚めるということを書いています。例えば，四元さんはこう書いています。「四国の自然に囲まれて歩くうちに，悩みや自分に対する不信から離れ，頭だけでガチガチに固めてこだわってきたものから解放されていく」，「歩くという行為は，人間に具わっている根っこの力を呼び覚ましてくれるようです」。

一方，辰濃さんは次のように言っています。「お遍路には『お四国病院』の異名がある。歩いているうちに細かなことが気にならなくなる。いらいらくよくよが減っていく。肩やヒジの痛みが消えてゆく。体内のとどこおっていたものがゆるやかに流れだす感じがある。自然治癒力がましてゆくのをからだが感じとっている」，「心身が解き放たれるにつれて，自分の思考を縛る『概念的なもの』がたいそうひからびたものに思えてきた」。

四つめは，これはどなたも強調されることですが，自然との一体感が出てくるということです。四国というところはやはり田舎で，自然がたくさん残っていますから，山道を何十日も歩いているうちに自分が自然のなかの存在であるということがわかってくると書いています。四元さんは，非常に文学的な表現ですが，「秋の遍路道を歩いていたとき。風が吹きました。草木が揺れ，稲穂が揺れ，私の髪も揺れました。『一緒に揺れている，みんな』。そのとき，自然の一部となっている自分に気づきました」，と書いています。辰濃さんは，「自然と人間，という対立的な思考がいかにもむなしいことに思えてきて，これはなにか妙に新鮮な感覚だった」，「私がへんろ道で学んできたものもまた，大自然に包みこまれて生きる歓びを味わうことであり，宇宙の営みをからだで感ずることであり，自分のなかの太古，もしくは野生の生命力を呼び覚ますことだった」と書いています。自然の一部になるのだという感覚が出てくるということです。

五つめは神秘的体験です。これも皆さん口をそろえて書かれることです。ご存じのように，四国遍路というのは弘法大師空海が始めたといわれる巡礼で，いたるところに弘法大師空海の伝説，ご利益，不思議な話が残っています。そのため，お遍路さんにとっては，四国全体が霊的な空間，スピリチュアルな空間となるわけです。そして信じがたいようですが，実際に歩く人はどこかで不思議な体験をするのです。四元さんは，「手にしたろうそくに火を灯して供えようとしたとき，ふと，どこからか声が聞こえてきたような気がしました」と書いています。辰濃さんは，「不思議な体験だった。歩き出すと，あとはお大師さんが後押ししてくれるようにからだに勢いがつき，足に力がゆきわたり，一気に登ることができた」と書いています。

六つめは，お接待・親切心です。四国遍路にはお接待という慣例があることはよく知られています。歩いていると，どこからともなくおばさんがあらわれ，「はい，お接待」と言って，物をパッ

と渡すわけです。私も少しだけ歩き遍路をやっていて，最初は本当にびっくりしましたが，だんだん慣れてくると遠慮なくいただけるようになりました。ただ，特に都会から遍路に来た人は，最初はびっくりし，警戒して物をもらわない人が多いようです。実際，都会でこれあげますよと言われて受け取ると後でたいへんな目にあいますから，都会の人は最初は受け取りません。でも，歩いているうちに，お接待というものが四国では当たり前なのだ，皆さん何の見返りも求めずに人にものを渡しているのだ，結局それが助け合いということになるのだ，そういうことがだんだんわかってきます。あちこちで物をもらえるだけでなくて，四国の皆さんは非常に親切です。特にお遍路さんは親切にしていただけます。これも都会から来た人は四国に来て親切にされると，なんか裏にあるのではないかと最初はびくびく警戒するわけですが，そうではない，四国ではお遍路さんをしていると皆から暖かくもてなしされるということがわかってきます。本当の親切とは何なのか，それがだんだんわかってくると皆さん書いています。

四元さんの文章を読むと，「よく『感謝の気持ちを表すことが大切。だから，ありがとう，といいなさい』というようなことが言われます。でも，私は子どもの頃から，そのことを疑問に持っていました，…中略…けれど，四国を旅し，そんな迷いは吹き飛びました。歩いて出会う方々への『ありがとう』は，心の底から湧いてきて，いつもよりずっとあったかい，正真正銘自分の感じている『ありがとう』が言えるのです」。四国の人の純真な親切にあって本当に心からありがとうが言えるようになったと書いています。

辰濃さんは，お接待を受けてお互いに助け合うということを改めて認識したと，次のように書いています。「四国を歩いた人の多くは，自分が歩くことができたのは自分ひとりの力ではない，自分は歩かせてもらったのだ，たくさんの人びとの助けで歩かせてもらったのだ，という気持ちになる」。

七つめは，1200 kmを歩き，いろいろな経験をした結果，最後になにか新しい自分に生まれかわった，自分は再生した，新しい自分になったということを，皆さん口を揃えて書いています。四元さんは，これは歩き遍路を勧める文章の中ですが，「旅から戻ったとき，きっと前よりもひとまわり大きくなった自分に気づくと思います」，つまり，ひとまわり自分というものが大きくなるのだ，大きくなることができるのだということを書いています。

辰濃さんの文章には次のようにあります。「数え切れない人が，四国の道を歩き，苦行をし，生きる上で一番大切ものはなにかをもとめ，自分の中の死滅していたものをよみがえらせようとしている。それは簡単なことではないが，そのうちに，こころの傷口が次第に癒え，新しい細胞がいきいきとよみがえってくることを体験する場合がある」。なにか失われていたものが，人間の本質に備わっているようなものが新しく蘇ってくる，そういう経験が四国遍路 1200 kmを歩く中でできるのだと皆さん書いているということです。

1200 kmを歩くとどういう身心の変化があるかということをまとめると，シンプルかつ過酷な徒歩生活を送り，自然と一体化するなかで，これまで身心を束縛してきたものから解放され，根源的な力を見いだす。さらに，神秘的な体験やお接待を経験することにより新たな自分に生まれかわる。これがたくさんの体験記に共通する，身心の変化についての最大公約数的なことといえるかもしれません。

では，最後に辰濃さんの本の 242 ページを読んで，私の報告の終わりとしたいと思います。「いまは，超過密，超高速の世の中全体が病んでいて，息苦しさや鬱屈や疎外感に苦しむ人びと，なんとかしてこころの地獄から自分を解き放ちたいと願

う人が，四国の地を踏みます。四国の人と風土は遍路びとを包みこんでくれます。…中略…一方に超過密，超高速の日常があれば，一方に，宇宙的な空間に遊ぶ非日常的な世界が必要なのです。大いなるもののなかに自分自身をほうりこむことで，私たちは日常の自分のこころの硬さ，卑小さ，愚かさ，大勢順応性などに気づきます。自分をよみがえらせる作業はそこからはじまります。私にとって，千数百キロの道を歩く意味はそこにありました」。

一気に歩くと50日，60日かかるので大変ですから，何回かに分けてでもかまいませんので，ぜひ皆さんも四国遍路1200㎞を歩くことにチャレンジしてみて下さい。はなはだ粗雑な話ではありましたが，以上で私の報告は終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

**石井**：ありがとうございました。続きまして，瀬戸先生からお話をしていただきます。よろしくお願いいたします。

# 西大寺会陽と宝木争奪戦
## ―「御福」を中心とする地域とその身体文化―

瀬戸邦弘
鳥取大学教育センター

### 1.「御福」を中心とする地域文化

岡山市に位置する西大寺観音院では旧暦の小正月に近い毎年2月第三土曜日に「会陽[i]」という行事が行われている。会陽とはこの地方の密教系寺院の修正会[ii]や神社の正月の祭礼に付随して行われる行事[iii]で，西大寺観音院の修正会ではその結願日に「宝木[iv]」と呼ばれる木片が裸群に投下され激しい争奪戦が繰り広げられており，これを「宝木争奪戦」と称する。そもそも，会陽行事は西大寺観音院に限らず岡山県（あわせて香川県の一部）の瀬戸内沿岸地域を中心に散在し，往時は岡山県内だけでも100ヶ所以上で行われていたと言われる。この地域では宝木を得たものを「福男」と呼び，彼らは一生の「御福」を手に入れるとされる。特に西大寺観音院の会陽は500年以上の歴史を有し，この地域の春の風物詩ともなっている。また，西大寺の会陽は参加者がまわし姿で登場する「裸祭[v]」としても知られ，昭和34年には岡山県の無形民俗文化財[vi]に，また平成28年には国指定重要無形民俗文化財に指定されている[vii]。

ところで，会陽における宝木争奪戦は，参加者が単に自身の力で競い合うコンペティションというわけではない。会陽が近づくと参加者達は宝木を「授かれる」ように，日々精進潔斎に励み，心と身体を磨くことになる。西大寺観音院の会陽行事はこれまで争奪戦の新奇さや激しさに注目が集まることが多かった。しかし，本稿では西大寺観音院の会陽行事の本質を理解するべく，宝木争奪戦に際して参加者が「自身に求め／神仏から求められる心と身体」，そして，それらを原資として得られる「御福」に関して考察を行うことになる。特に，信仰実践とそれを実現するためのメディアとしての身体に注目し，それらが如何に地域文脈で醸成されてきたのか，信仰と地域が育んできた伝統的身体文化に関する考察であり，延いては，

前近代という空間で育まれていた日本人の身体観に関する研究の一助としたい。

## 2. 西大寺観音院と門前町西大寺

一般に「西大寺」と呼ばれるこの寺院は，正式には高野山真言宗別格本山金陵山西大寺観音院と呼称され，岡山県岡山市東区西大寺に位置し千手観音を本尊とする真言宗の寺院である。これまで歴史上，たびたびの火災に見舞われ，本寺院には14世紀を遡る資料が残されていない。そのために，その創建に関しては不明な点も多いが，寺伝では天平勝宝三年（751年）頃周防国の藤原皆足[viii]が，金岡郷に千手観音を安置する草庵を開基したのが始まりとされ，その後宝亀八年（777年）に安隆上人が竜神のお告げを受け，現在の場所に観音堂を建立したとされている。当初は「犀戴寺」と表されていたが，承久三年（1221年）に後鳥羽上皇により「西大寺」と改称され，その後，度重なる増改築を経て現在の伽藍を備える大寺院になったと言われる（高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP 2019）。

また，観音院の位置する西大寺の町は吉井川の河口に位置する港湾都市であり，観音院の門前町の賑わいとも重なり，中世期を頂点に「宗教的核と港湾商業都市」として栄えた場所である。近世以降も讃岐の金毘羅，児島の由迦神社，備前西大寺の「観音院詣で[ix]」の要所として，舟運送による物資集散の拠点として発展，繁栄しその様子は昭和前半まで続いた。現在では，岡山駅を中心とするエリアに町としての賑わいは移ったが，往時の「都市の記憶」は街並みとして遺され，趣深い歴史文化空間となっている。

## 3. 西大寺における修正会と会陽

西大寺観音院の会陽行事が修正会に伴って行われることは前述した通りである。そもそも，修正会とは修正月会の略であり，毎年正月に各宗寺院で行われる年始の法会を指す。元日から七日間（一七日），十四日間（二七日）など，開催箇所により日時や期間に関して一様ではないが天下泰平，国家安寧，五穀豊穣，商売繁盛などが祈念されることになる。ところで修正会とは単なる仏教行事ではなく，神道や陰陽道，民間信仰などと結びつき，発展してきたことはすでに指摘されており，その複合的世界観は西大寺観音院の会陽や宝木争奪戦を考察する際に示唆的である（西大寺会陽記録保存委員会 1980:29）。

西大寺観音院における修正会は宝亀九年（778年）開祖安隆上人の時代に遡り1200年余の歴史を有すると言われ，本寺院にとり最も重要な行事とされる（西大寺会陽記録保存委員会 1980:29-43）。西大寺観音院の修正会の法会は住職以下，周辺の真言宗系寺院から集まる10余名の僧侶により「職衆」が編成され執り行われ，毎年，本尊である千手観音の前で十四日間，二十二座の法会が営まれている。ところで，さまざまな信仰との結びつきが指摘される修正会であるが，当該地域ではその結願日に多くの仏閣で会陽行事が営まれており，それは本地域の修正会の特徴とも言えよう（立石 2007:13-15）。

西大寺観音院における会陽や宝木争奪戦の成り立ちに関しては，やはり火災で史料が失われており判然としない部分が多いが，寺伝では永正年間に時の住職忠阿上人が火災で消失した本堂再建のために「牛玉紙（ごおうし）」の頒布を始めたことによるとされる[x]。その後，修正会の法会を経た霊験あらたかな牛玉紙は「幸運五福（寿，富，康寧，好徳，終年）」を齎すと評判が地域に拡がり，止むを得なく参集した群集にこれを投与したところ激しい奪い合いが発生し，今日の宝木争奪戦の原型が生まれたとされる。その後，争奪に際し牛玉紙はすぐに破れてしまうため，牛玉紙で木片を包み投げ

入れるようになり，それが一対二本の宝木へ変化してきたと伝えられている（西大寺会陽記録保存委員会 1980:44-48）。

このように西大寺観音院の会陽は，後に修正会に付随する行事として生まれ，発展してきたものであり，宝木争奪戦もまた然りである。一方で，時代が下り牛玉紙や宝木（争奪戦）の価値が高まるにつれて，修正会自体に逆に会陽や宝木争奪戦に関係する要素・行事が多く組み込まれていくことになったと考えられる。先に述べたように，修正会という行事自体がそもそも他の信仰に関して「寛容」な空間であったために，結果的にそれらと複雑に関係し，それらを巧みに取り込みながら約一ヶ月にも及ぶ大行事「西大寺観音院の修正会・会陽」が醸成されてきたと考えられるのである。

## 4. 西大寺会陽における宝木と宝木争奪戦

### 4－1. 宝木とは

上記のように，宝木争奪戦の起源は牛玉紙の争奪といわれる。そもそも西大寺観音院の牛玉紙とは杉原や日笠といった和紙に「牛玉　西大寺　宝印」と判を押したものである（写真１）。牛玉紙は元来「牛玉札（ごおうふだ）」とも呼ばれ，寺院や神社で頒布される厄除けの護符のことであった。その中で，仏教諸寺院では「牛玉」を仏教世界の「宝珠」と位置づけ，世の中の万物を生み出すものとしてこれを人々に授けることになった（高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP 2019）。ところで，会陽を実施する寺院・神社の多くが一対二本の宝木を人々に授けている。宝木が二本用意される理由は会陽を実施する寺院・神社により多少異なるが[xi]，基本的には陰陽道における「陰と陽」の関係性で語られる場合が多く，西大寺観音院もその例外ではない[xii]（瀬戸 2019）。その場合，二本の宝木とは「世界の気のバランスや調和」を顕在化させた存在と理解してよいだろう。

宝木争奪戦の準備は修正会の結願日から遡ること十九日「事始（ことはじ）め」の行事に始まる。事始めでは会陽の安全を祈る法会が執り行われ，また，別室では宝木を成形する道具の準備である「道具磨（どうぐみが）き」が実施される。続いてその三日後には「宝木取（しんぎと）り」の行事が実施される。これは宝木の原木を観音院の西方約３キロに位置する広谷山如法寺無量壽院[xiii]まで出向き，貰い受ける行事を指す[xiv]。この行事では，現在でも古式ゆかしき出で立ちや所作が護られており興味深いところである（写真２）。午前０時に観音院で住職から挟箱（原木を収める箱）を預かると，一行は所定のコースを通り無量壽院を目指す。ところで，この行事は「無言」が厳守されており，道中で一切の発声・会話は許されない。また以前は道中で人に出会うことさえも

写真１　牛玉紙と福男

写真２　宝木取り一行

許されておらず，もしも人に出会ってしまった場合には，観音院まで引き返さねばならなかったとされる（西大寺会陽記録保存委員会 1980:69-70）。宝木取りによって観音院に持ち帰られた原木は，屏風で四方を囲み遮蔽された空間を創出した後，愛染明王像の眼前で観音院および無量壽院，寶琳寺[xv]の住職により，宝木の形に成形されることになる。これを「宝木削り」と呼び，現在でも会陽行事の中で「絶対的秘事」とされるもののひとつである。宝木削りにて形作られた宝木は，その後，修正会の 14 日間本堂内陣にて祈寿を受けることになるが，その二日目に「牛玉封じ」の行事が行われ，木片に仏様の種子が書き入れられ，入魂の飾りつけがなされ，これによって木片は宝木として“魂”を宿すことになるのである。ちなみに，西大寺観音院の会陽における宝木は直径約 4 ㎝，長さ約 20 ㎝の円筒状で上部に T 字型の割れ目が入れてある。この割れ目は「三弁の摩尼宝珠[xvi]」であり，仏教における三部（仏部，宝部，蓮花部），三密（仏の体，言葉，心），三宝（仏，法，僧）をそれぞれ表すものとされ，宝木が創成された段階から確認できるものと伝わる（三浦 1984:11-12）。

### 4 - 2. 宝木争奪戦

2 月第 3 土曜日[xvii]の夕刻になるとまわし姿の男達が町中から「わっしょい，わっしょい」の掛け声とともに観音院に集結し始める。彼等は本地域では通称「裸」と呼ばれており，まず観音院の仁王門を潜り境内に入場し垢離取場[xviii]の冷水にて身を清める。その後，「牛玉所大権現[xix]」や「四本柱[xx]」など境内各所を幾重にも巡り拝しながら，最終的に本堂大床の上にて宝木争奪戦に備えることになる。

22 時[xxi]観音院本堂上方の「御福窓」から観音院住職により，その年の「恵方〔開きの方角〕」に向けて宝木が投下される。宝木投下直前，裸群は大床の上に犇めき，一人に許されるスペースは「枡」一つ分ほどと言われる（写真 3，4）。宝木投下の瞬間は照明を一瞬消すため宝木の行方を確認するのは難しく，それは宝木の争奪戦を激しくする効果を持つことになる（三浦 1984:56；Seto 2005:171-178）。また，宝木投下前後に職衆によって「投げ牛玉[xxii]」が脇窓から多数投下されるために，裸が宝木の行方を追うことが更に難しくなる。というのも，実は宝木や投げ牛玉からは修正会祈祷の際に染みついた同じ香の香りが発せられており，この香りを頼りに裸が集まることになるからである。結果として，香の香りを中心に大きな人の塊が形成されていくことになり，この集団を会陽では「渦」と呼ぶ。渦は徐々に大床から境内へ移動を始め，また参加者を試すかのように毎年いくつもの渦がここかしこに形成され，境内での宝木争奪戦は一層混乱を招き，その分激しさ

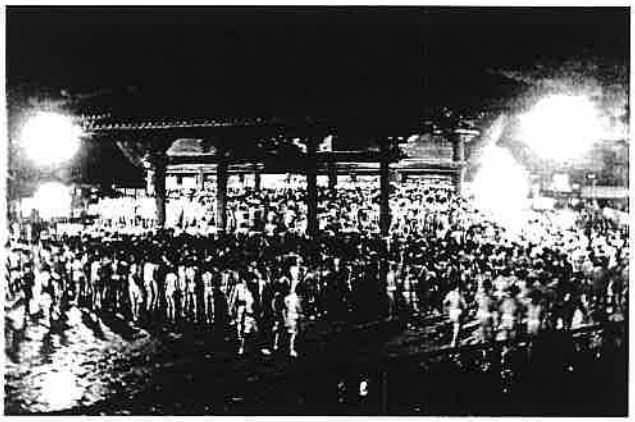


写真 3　宝木争奪戦（本堂外観）

写真 4　宝木争奪戦（本堂大床）

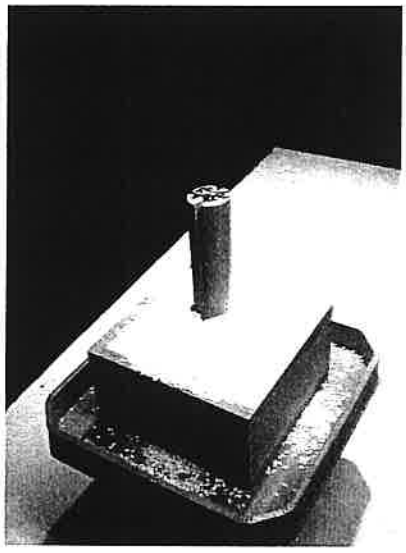


写真５　宝木

を増すのである。

（参加者レベルでは）二本の宝木が観音院仁王門から外部に持ち出された時点で争奪戦は終了となり，その状態を「宝木が抜けた」と表現する。（当日の行事レベルでは）その後，宝木の仮収め場所である仁王門近くの岡山商工会議所西大寺支所に設けられた（米の入った）枡に宝木が納められ（写真5），観音院側による宝木の検分が終了した時点で（当日の）争奪戦は決着し，「福男（取り主）」が決定することになる。その後，「祝い込み」の行事を経て，宝木はその年の「祝主」に渡されることになる（西大寺会陽記録保存委員会 1980:75-76；Seto 2005:171-178）。

翌週の火曜日，住職，祝主と関係者，取り主と関係者，寺の総代が集まり「宝木納め」の祝式が行われる。それらが済むことによって宝木争奪戦に関する全ての式次第が終了するのである。その後，後祭りが始まる。祝主から寺に贈られた米俵が，また檀家から贈られた酒，醤油などが本堂西側に並べられる。後祭りの期間中には境内で植木市，飲食店など露店が並び賑わいを見せる。そして，会陽は「後会式」を迎えることになる[xxiii]。稚児入練供養[xxiv]，ならびに庭義理趣三昧法会[xxv]が行われ，一ヶ月に渡った修正会，および会陽に関する行事の一切は終了するのである。

## 5. 修正会と会陽　複合的信仰の世界

修正会の法会は基本的に「悔過法[xxvi]」に拠り実践され，旧年の悪を正し新年の天下泰平などを祈る空間となる（瀬戸 2019；中村他 1989:267,502）。西大寺観音院における修正会では，本堂内陣に位置する本尊である千手観音の眼前で十四日間，毎日諸法を厳修し祈願される。あわせて，そこでは備前各地に鎮座する「神々」の名前が読み上げられる「備前国神名帳の朗読」や，五穀豊穣を祈る神道における「祈年祭」の要素も含まれることになる（西大寺会陽保存委員会 1980:33-36；瀬戸 2019；三浦 1985:44-46）。このように，西大寺観音院の修正会も厳密に仏教に限らず，他の信仰を包含する空間となる。民俗学者五来は，そもそも仏教行事そのものが日本人の精神生活や社会生活に溶け込む形で生まれ，修正会も国や地域の諸信仰と共生しながら成立したことを指摘しているが，まさに，西大寺の修正会もその例に漏れず「複合的信仰の世界」を体現する場となっているのである（五来 1980:84-98；西大寺会陽記録保存委員会 1980:25；三浦 1985:44-46）。

また，会陽行事も修正会と同様に仏教世界に留まるものではない。それは民間信仰等の諸要素を内包し，複合的信仰の世界を結実するための空間となる。たとえば，西大寺観音院では会陽の起源を「一陽来復」説をもって説く。そこでは「…会陽の語源は，困難で厳しい冬が過ぎ，やがて陽春を迎えるという吉兆の意味である…」とされている（高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP 2019）。ところで，この一陽来復という思想は，そもそもは陰陽道に起源し，万物の生成を陰と陽の二気に分けて夜を陰，昼を陽とし，1年を立春から大寒までの二十四節気に分ける。そうすると冬至が陰の極点となり，この日を起点に陽の力が再び増してくることになる。そのために，古くは

冬至を一陽来復と称し新たな季節（生命）の誕生の節目として重要視したのである。田中も会陽の本質を一陽来復と指摘しているが，このように，「一対二本」の宝木もそうだが，会陽行事もさまざまな思想や価値を重要な要素として形成されてきた空間といえるのである（田中 2007:9-11）。

ところで，そもそも西大寺会陽の実施されていた旧暦小正月の行事の多くは，生業の中心であった農業と大いに関係しており，会陽もその文脈にあったと考えられる。古くから，人々は月の満ち欠けを基準とし農業を実践しており，特に新年初めて迎える望月の日は一年の起点，重要な節目と理解されていた。そのために，小正月とは庶民にとって実質的な年の初めであり修正会の結願日にあたる 1 月 14 日は大晦日，翌 15 日は正月元旦と理解されていたのである（板橋 1999:624）。たとえば東北，中部，九州などの地域には「十四日年越し」という言葉も残っており興味深いところである（田中 2007:10）。つまり，会陽とはまさに冬から春への節目に位置する行事なのである。また，それら正月行事では「年神を迎え，祀る」年神信仰が重要な役割を果たしていたが，この年神は会陽という行事の本質を考察する上で重要な存在である。たとえば，小正月に行われる「松迎え」や「若木迎え」，「若水汲み」などは興味深い点を多く含んでいる（内田 2000:576-577；田中 1994:672）。たとえば，「松迎え」とは山に分け入り，正月用の松の枝を伐って来る行事を指すが，これを経て人里に齎された松の枝は年神の依代とされ，丁重に家々に迎えられることになる。また「若木迎え」，「若水汲み」などで得られた木や水には年神が宿り，もしくは年神を迎えるための重要な品々とされる。人々は若木を薪とし若水を用いて新年の煮炊きを行い，年神を迎える準備を行うのである（直江 1994:256-257）。山深くに存在する年神を木や水に宿し人里へ迎え入れることは，すなわち新たなエネルギー（生命）を人間界へ運び込むことを意味する。また，一説ではこのようにして里に招き入れられた年神は，その後「稲」に宿り田に豊作を齎し，秋を経てまた山に帰っていくものともされる。そのために，年神は「作神」，「タガミ（田神）」と同一視されることも多く，農耕神として理解される場合も多いのである（田中 2000:211；宮本 1994:500-501）。このように，年神とは自然のサイクルの中心に位置し，自然の恵みを人間界に齎す超自然的な存在なのである。

さて，本事例に引き付けて考えてみる。実は，会陽行事や宝木には年神との関係において興味深いところがいくつか確認できる。たとえば，宝木争奪戦において，宝木は毎年「恵方〔開きの方角〕」，つまり年神の居る方角に向けて投下されていることは先述した通りである。また，境内に設置されている四本柱の縄の結び目は，必ずその年の恵方に向けて結ばれており，その空間は恵方に向かって開いているのである。そして，宝木争奪戦に関する言い伝えに「宝木は恵方（の方向）でないと抜けない」というものあり興味深い（小池 1994:732；瀬戸 2019；宮内 1999:211）。このように宝木争奪戦において恵方という概念は強く意識されており，その背景にある年神が重要な意味を成している可能性が示唆されるのである。また，「宝木取り」について考えてみる。宝木の原木を貰い受ける無量壽院が立地する芥子山は古くより権現を祀り，また山岳信仰の修行場であったとされ，この地域の「聖なる空間」となる。そのため，この地で採取される原木には聖域の持つエネルギーが含まれ，宝木はちょうど年神に対する松や若木のように依り代の役目を果たすことにもなろう[xxvii]。一説には，芥子山の内包する力を宝木に籠めることも，無量壽院が宝木取りに関係するひとつの理由とも言われ興味深いところである（瀬戸 2019）。このように，恵方や年神信仰の在り方と宝木に纏わる行事の関係性は，宝木の出自や意味を考える上で示唆的であろう。実は，観音院でも

その点には以前から注目しており，観音院においても宝木の内包する性質の一つとして年神を想定し言及している。宝木には年神の持つ超自然的な力が内包されると理解されるところである（瀬戸 2019）。

会陽の中には他にもさまざまな信仰や俗信の要素が確認できる。たとえば西大寺観音院近郷の金山寺[xxviii]では自寺社の会陽を「五穀豊穣のための百姓の祭り」と説明しこの行事の持つ予祝儀礼的性格が看取される（小嶋 2007:43）。金山寺では西大寺と同様に宝木を五穀とともに紙に包まれて投下するが，激しい争奪戦の際に境内に散った五穀は「縁起物」とされ，集まった人々はこぞってそれを集め持ち帰えることになるのである。このような民間信仰や俗信的要素はその他にも存在する。たとえば，裸が練った後に大床に残された土（泥）を集めて田畑に撒くと「虫害を免れる」とされ，投げ牛玉を田や苗代に立てると「虫よけ」になるとも言われる。また，会陽に出た者のまわしを腹帯にすると「安産」となるなどのさまざまな俗信が民間で伝承されている（小嶋 2007:43-45）。このように，会陽という空間には仏教だけでなく陰陽道や神道，民間信仰などさまざまな世界観が共存・共生しているといえるのである。

さて，これまで会陽の含有するさまざまな価値について紹介してきたが，そもそも会陽という行事に籠められる，その中心にある「仏教的価値」とはいったいどのようなものであろうか。宝木に籠められる仏教的価値を考えてみる。

## 6. 宝木の含有する仏教的価値

先述したように，宝木の上部にはＴ字型の切れ込みが存在し，三弁の摩尼宝珠を表しているとされ，その意味で宝木とはまさに仏教的価値を具現化した存在といえよう。ところで，摩尼宝珠とはどのようなものであろうか。辞書的意味において摩尼宝珠とは，不可思議な力を兼ね備えた宝珠とされ，人々のあらゆる願い，如何なる願望も叶える魔法の珠とされている（中村元他 1989:956）。ところで，観音院では西大寺会陽の宝木は「摩尼宝珠」そのものであるのと同時に「摩尼宝珠を生み出す道具」でもあるとも指摘しており興味深いところである（瀬戸 2019）。観音院によれば「宝木は，大床に参集した衆生の願いとしての煩悩を吸引し，それを原資として新たな摩尼宝珠を生み出すことができる。つまり，宝木とは数多の煩悩を宝珠へ昇華させる「打ち出の小槌」のようなもの」となる（瀬戸 2019）。

ところで，一般的に「煩悩」と「悟り」は対立的に位置付けられるが，その一方でこれらは「不二・相即[xxix]」の関係であるとも理解されている。大乗仏教，特に密教の世界観では「煩悩とは即ち悟りの縁」とも表現され，煩悩と悟りとは本質的には「同じもの」と理解され，この考え方は「煩悩即菩提」と呼ばれる（中村元他 1989:947）。ところで，実は「煩悩即菩提」の見地からすると，会陽における宝木の存在，そしてその争奪戦の成り立ちは理解しやすいところでもある。たとえば「宝木削り」を考えてみる。宝木削りの所作が愛染明王の前で行われることはすでに述べたが，これは非常に興味深い。実は，愛染明王とは「煩悩即菩提」を表す尊であり，衆生が本来的に具備する愛欲をそのまま悟りの境地である「浄菩提心の三昧」へと誘う役目を担うのである（中村元他 1989:3；福田 1987:17）。宝木が愛染明王の眼前で成形されること，それはすなわち人々の煩悩を悟りに導く珠（道具）を形作るプロセスに他ならないと考えるのは，むしろ自然な流れなのかもしれない。衆生の願い（煩悩）が大床の上に集まり，それらが愛染明王の力を授かった摩尼宝珠である「宝木」に吸引され，浄化・昇華されていく。そのように考えると，会陽における宝木争奪戦とは，まさに真言密教の世界に存在し，それを体現し，

実現させるものとも言えるのである。宝木の争奪とは，まさに真言宗の重要な教えである「現世利益[xxx]」を具現化させたものといえるのかもしれない。

ところで，修正会の法会を行う観音院本堂の内陣は「浄土の世界」と言われ，一方で，裸たちが騒めく本堂大床はまさに衆生の生きる「市井の空間」とされる。そのために宝木を内陣から大床に投与した瞬間に，宝木は象徴的に世の中に顕現することになり，同時に宝木は「生命を宿し，生まれる」と言われる。また，宝木が授かる「生命」とは，単に宝木が市井に現れることにより得られるものではなく，それは取り主との関係の中で創られるものと指摘される（瀬戸 2019）。つまり，宝木とは大床の上に現れ，裸達の煩悩を吸収し始めることによりその生命が芽吹き始め，誰かに「授かられた」ことによりこの世に生まれるとも考えられるのである。また，興味深いこととして取り主も宝木を得た瞬間に（良くも悪くも）その内実に大きな変化を生じると言われる（瀬戸 2019）。

たとえば，会陽に関する俗信に「福男の災難」というものがある。これは，福男が御福を授かるのと引き換えるように，不運に見舞われる様を表現する言葉である。意外に思われるかもしれないが，実際に，福男が事故や怪我・病気などに見舞われた事例が少なからず伝えられている（小嶋 2007:43-44）。この現象を評して関係者は「御福が大きかったから」と説明するが，これは，取り主が宝木の大きな力をうまくコントロールできなかった様子を表していると思われる。たとえば，宝木の力を受け止められない者が偶然にもそれを得た場合，その力に圧倒され宝木の力が取り主にとって災厄となってしまうこともあると考えればいいだろうか。つまり，宝木とはアプリオリに「御福を与えてくれる存在」とはならないのである。そのために「御福」をきちんと授かるためには，宝木が内包する巨大な力を受け止めることができる人間になる（である）必要がある。そう考えると，裸達が行う精進潔斎や水垢離など修行は（ある意味で）宝木に“対抗”できるように，自身の身体を鍛え，心を鍛える必要から生まれるものともなろう（写真 6）。そして，その文脈からすれば，観音院住職が説く「宝木争奪戦に参加するならば，心身を鍛えてその中心に「仏心」を涵養せねばならない」という教えは非常に分かりやすく，理に叶ったものとなるのである（瀬戸 2019）。西大寺会陽に際して行われる精進潔斎や水垢離[xxxi]など「行」は，浄祓する悔過（けか）の過程であるが，その途次で裸達は心と身体を強靭に鍛え，身体という器に「仏心」を宿し，宝木という強大なエネルギー体を受け止められるようにする鍛錬のことなのである。そして，それを成し遂げた者はひょっとすると「即身成仏」が叶う存在に近づくのかもしれない。

写真 6　禊の行

## 7. 複合文化表象としての宝木 「はだか」が求め / 求められる価値

これまで述べてきたように，会陽における「御福」が可視化されたものが「宝木」であり，宝木とは仏教の世界でいえば観音様の種子の籠った摩尼宝珠であり，また人々の煩悩を摩尼宝珠に変える，いわば“マジックアイテム”となる。また，同時にそれは年神でもあり，まさに神仏習合のシ

ンボルともなるのである（田中 2007:8）。あわせて，年神は農耕神とも同一視されるため，超自然的な力によって田に恵みを齎し，また宝木に紐づくさまざまな事物や事象が虫よけ，安産などを保証するように，さまざまな霊力を持って日常に幸せを運ぶ存在となる。このように会陽は修正会と同様に，仏教や神道，陰陽道，民間信仰・俗信などさまざまな宗教や信仰の複合体として醸成されてきたのである。その中で，その価値の中心に存在し，その世界を体現する宝木とは，まず「一対二本」の関係性が世界の気のバランスを表象し，また個々の宝木は①仏様の下にある摩尼宝珠としての力，②年神の齎す超自然的な力，③民間信仰・俗信をも含意する牛玉紙の持つ護符としての力など，さまざまなエネルギーを包含する象徴的存在であり，すなわち，それは地域の諸信仰の複合的シンボルとして「御福」と呼ばれるのである。

そのために，宝木争奪戦は単に人間界で人間同士が競い合うものではなく，複合的価値としての「御福」を得られるように自身の身心を清め，高める必要があり，参加者は精進潔斎に励み，その世界観に合致する自身を醸成することになる。この場合，裸とはすなわちそのプロセスとその実現に際し必要な「メディア」であり，清浄無垢を体現し，また，悔過を実践するために重要な存在である。つまり，メディアとしての身体とは，御福と仏心を宿した自分を繋ぐ重要不可欠な媒体となるのである。

## 8. まとめ—複合的信仰の結晶「宝木」と西大寺会陽文化

本稿では，信仰とそれを実現するためのメディアとしての身体に注目し，それらが如何に地域の伝統的文脈の中で培われてきたのかについて考察してきた。複合的な価値「御福」が可視化された存在としての「宝木」を得るために参加者は会陽に向けて，自身の身心を準備する必要があることが理解され，その過程としての精進潔斎や水垢離などを行う必然性が確認できた。人々は修行に励み，身体を鍛えその中心に「仏心」を涵養し，仏教を中心とする複合的世界観に合致する自身を形成することに励むのである。つまり，会陽において裸衆とは，単なるコンペティションへの参加者ではない。また，参加者の身体とは，ある意味「文化的な器」であり，彼らの身体は西大寺会陽と地域が育み，神仏に期待される地域と自身を繋ぐ重要なメディアなのである。

写真７　福男と仲間たち

西大寺会陽には「宝木は奪うものではない。授かるものである。」という言葉がある。彼らは，一説に 2 ／ 9000 と言われる確率から福男になること自体が，そもそも自分で望んだところで叶うものではない次元にある奇跡的な出来事であることを理解している。そのために精進した結果として「御福」を「頂戴する」ことが叶った場合においても，自分自身の力で得られたなどとは思わず，大きな力からの「授かりもの」と実感できるのである。

これこそ，会陽という行事の本質であり西大寺観音院と街，そして人々が育んできた「西大寺会陽文化」といえるのではなかろうか（写真 7）。

**【謝辞】**

本稿の作成にあたり坪井稜広氏（金陵山西大寺観音院住職），岡崎俊男氏（西大寺会陽院内世話役代表），林正二郎氏（会陽林グループ代表），斎藤雅之氏（同グループ），奥

山太一氏（同グループ），川部裕司氏（同グループ），中野将史氏（同グループ），はじめ会陽林グループの皆様，西大寺観音院会陽関係者の皆様，松岡太郎氏（岡山市）には本稿作成に際したいへんお世話になりました。この場を借りて心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

**【主要参考文献】**

板橋春夫「小正月」『日本民俗大辞典』上 福田アジオ他 あ～そ 吉川弘文館 1999 p.624

内田賢作「松迎え」『日本民俗大辞典』下 福田アジオ他 た～わ 吉川弘文館 2000 pp.576-577

大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂 1994

岡山県教育委員会『「岡山県の会陽の習俗」総合調査報告書』岡山県教育委員会 2007

小池長之「巡り神」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 p.732

小嶋博巳「民間信仰・俗信」『「岡山県の会陽の習俗」総合調査報告書』岡山県教育委員会 岡山県教育委員会 2007 pp.43-45

五来重「修正会・修二会」『講座日本の民俗宗教 2』弘文堂 1980 pp.84-98

五来重・桜井徳太郎・大島建彦・宮田登『講座日本の民俗宗教 2』弘文堂 1980

西大寺会陽記録保存委員会『西大寺会陽 西大寺会陽記録保存報告書』西大寺会陽記録保存委員会 1980

瀬戸邦弘 フィールドノート 2019（日時:2019 年 1 月 10 日，於：西大寺観音院，インタヴュー：坪井 綾広氏（西大寺観音院住職），斎藤雅之氏（会陽林グループ））

立石憲利「県内の会陽の分布と種類」『「岡山県の会陽の習俗」総合調査報告書』岡山県教育委員会 岡山県教育委員会 2007 pp.13-15

田中宜一「松迎え」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 p.672

田中久夫「年神」『日本民俗大辞典』下 福田アジオ他 た～わ 吉川弘文館 2000 p.211

田中英機「会陽の概要」『「岡山県の会陽の習俗」総合調査報告書』岡山県教育委員会 岡山県教育委員会 2007 pp.8-13

直江広治「小正月」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 pp.256-257

中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士『岩波仏教辞典』岩波書店 1989

萩原秀三郎「裸祭」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 p.570

福田亮成『真言宗小事典』法蔵館 1987

松長有慶『密教』岩波書店 1991

三浦　叶『岡山の会陽』岡山文庫 1985

宮内貴久「恵方」『日本民俗大辞典』上福田アジオ他 あ～そ 吉川弘文館 1999 p.211

宮本袈裟雄「歳神」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 pp.500-501

宮本袈裟雄「若水」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 p.805

福田アジオ他『日本民俗大辞典』上 あ～そ 吉川弘文館 1999

福田アジオ他『日本民俗大辞典』上 た～わ 吉川弘文館 2000

Kunihiro Seto “ Traditional and Acculturation of Ethnic Sports in Japan :Ball game “Eyou” “International Journal of Sport and Health Science” Vol.4 pp.171-178 2005.09

**【参考 HP】**

高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP（2019 年 1 月 14 日確認）

**【註】**

[i] 会陽行事の中心は宝木争奪戦に限るものではなく，餅会陽，福引会陽，餅まき会陽など，さまざまな形が確認されておりその形態は一様ではない（岡山県教育委員会 2007:14-15）。

[ii] 修正会の法会は天平宝字 3 年（759 年）以前より官大寺で行われていたと言われる（中村他 1989:502）。

[iii] 会陽行事は寺社や神社において信仰の枠組みを超えて実施されており，会陽の持つ複合的な世界観を考える上で非常に興味深いところである（岡山県教育委員会 2007:18-19）。

[iv] 宝木は「真木」，「神木」，「榊木」，「信木」，「新木」などと開催される寺院や神社によって異なる表記が確認できる。また，西大寺観音院の宝木の表記もこれまで歴史的に幾度となく変遷を経験しておりこの地方における「しんぎ」の本質を考える上で，興味深いところである（岡山県教育委員会 2007:29）。

[v] 参加者が裸（もしくはまわし姿）で行う祭を指す。禊や年占を目的とするものが多く，水垢離で身を清めた後に実施される場合が多い。裸で祭りに参加する意味は「生まれたままの清浄無垢な姿」になることを意味するとも言われる（萩原 1994:570）。

[vi] 昭和 34 年 3 月 27 日に指定される。

[vii] 平成 28 年 3 月 2 日に指定される。

[viii] 周防の国玖珂の荘の人で，備前国国府の役人藤原泰明

の妻と言われる（三浦 1985:28-29）。

[ix] 江戸期後半になると讃岐の金毘羅宮，児島の由迦神社は備前西大寺の観音院詣で一種の参拝経路となり，どれがかけても「片詣り」とされて嫌われたそうである（西大寺会陽記録保存委員会 1980:60-61）。

[x] 忠阿上人は，祈祷札である牛玉紙の浄財により熊野社が復興を遂げた例を参考に，観音院本堂復興のために牛玉紙を利用したと言われる（瀬戸 2019）。

[xi] 岡山県瀬戸内市牛窓町の高野山真言宗千手山弘法寺では「金剛界」と「胎蔵界」にて区別しており興味深い（三浦 1985:19-20）。

[xii] 西大寺観音院においても一対二本の宝木は「陰・陽」の意味を表すものと理解されているが，現在では，ことさら強調して対外的に語られることはない（瀬戸 2019）。

[xiii] 岡山市東区芥子山山腹に所在する高野山真言宗の寺院。神亀二年（725 年）の創建とされ，本尊は薬師瑠璃光如来である。

[xiv] 西大寺観音院以外の寺院や神社では，深夜に境内の山林においてその年の吉方に向かって原木を伐る場合が多いとされる。またその際に原木を伐った場所や樹種などは秘密にされる場合が多い（岡山県教育委員会 2007:29-30）。

[xv] 岡山市西大寺金岡東町にある高野山真言宗の寺院。弘仁 3 年（812 年）の創建とされ，本尊は千手観音菩薩である。

[xvi] 仏典では不可思議な力を兼ね備えた宝珠とされる（中村他 1989:956）。

[xvii] 西大寺会陽は本来「旧暦」で行われ旧暦の 1 月 14 日の夜に実施されていた。しかしながら諸事情から昭和 37 年より旧暦 1 月 14 日に近い新暦 2 月第 3 土曜日に固定して開催されることとなっている（西大寺会陽記録保存委員会 1980:65）。

[xviii] そもそもは吉井川の水が引き込まれ，参加者が禊を行う場所であった。現在は川の水を引き入れてはいないが，同様の意味，目的により裸の順路となっている。

[xix] 本寺院では元来密教の明王である五大明王を，神仏習合の姿である牛玉所大権現として牛玉所殿本殿に祀っている（高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP 2019）。

[xx] 会陽で裸群が押し合う場に設けられる柱で仕切られる空間を指す。四本柱は本堂の内陣に見立てられた空間であり浄土世界で行を行うように裸達は四本柱で練るのである。西大寺観音院の場合は約 2.8m の間隔で太い四角柱が設置され，柱の上部に太い縄が張られている。また縄の結び目はその年の恵方の方角になるように準備がなされる（瀬戸 2019；三浦 1985:24-25）。

[xxi] 諸般事情のために平成 22 年から午前零時の投下が 22 時へ変更されている。

[xxii] 「枝牛玉（えだごおう）」，「串牛玉（くしごおう）」などとも称されるが，一般的には「くしご」と呼ばれる。柳の木を 7 寸ばかりに切り 5 ～ 7 本を一握りとして，牛玉紙で巻いたものである（西大寺会陽記録保存委員会 1980:35）。

[xxiii] 以前はこれに合わせて，歌舞伎場面を再現した等身大人形の並ぶ舞台も作られて，後会式の名物であった（三浦 1985:69）。

[xxiv] 稚児入りとは 3 ～ 8 歳の少年少女が稚児衣装を着けて行列に参加し，本堂の濡縁を 3 回廻ることを指す。練供養とは，特設のまたは寺内の集会所から地面を通って道場に行くことを指す（西大寺会陽記録保存委員会 1980:78-79）。

[xxv] 庭儀とは，道場の前庭に整列して仏讃嘆に博士（曲）をつけて唱え入堂することを指す。理趣三昧とは心を理趣経に専注して営まれる法会のことを指す（西大寺会陽記録保存委員会 1980:78-79）。

[xxvi] 罪過を懺悔し，礼仏して身口意の罪過を発露懺悔し，五穀豊穣などの利益を求めるものとされる（中村他 1989:267）。

[xxvii] 「道中で人に会ってはならない」という決まりごとは，ある地域の「若水取り」にも認められ，その関連性は興味深いところである（宮本 1994:805）。

[xxviii] 岡山県岡山市北区金山寺にある天台宗の寺院。正式には銘金山観音寺遍照院である。天平勝宝元年（749 年）の創建とされ，本尊は千手観音である。

[xxix] すべては真実不変の真如の現れであり，悟りの実現を妨げる煩悩も真如の現れに他ならず，それを離れて別に悟りはないとされる（中村他 1989:947）。

[xxx] 神仏の恩恵や信仰の功徳が，現世における願望の実現として達成されることを指す（中村他 1989:290）。

[xxxi] 本来，水垢離など荒行は密教の本来的な行ではなく，いわば前行ともいうべきものである（松長 1991:107-109）。したがって，これも他の信仰の影響により西大寺会陽に導入され，結果として大きな価値が生まれ，受け継がれてきた可能性も指摘される。三浦も禊習俗は後から会陽に加わり，水垢離が行われるようになった可能性を挙げている（三浦 1985:32）。

※本原稿は，発表原稿を元に書き改めたものである。

石井：続きまして，鄭先生よろしくお願いします。

# 出羽六十里越街道と身体

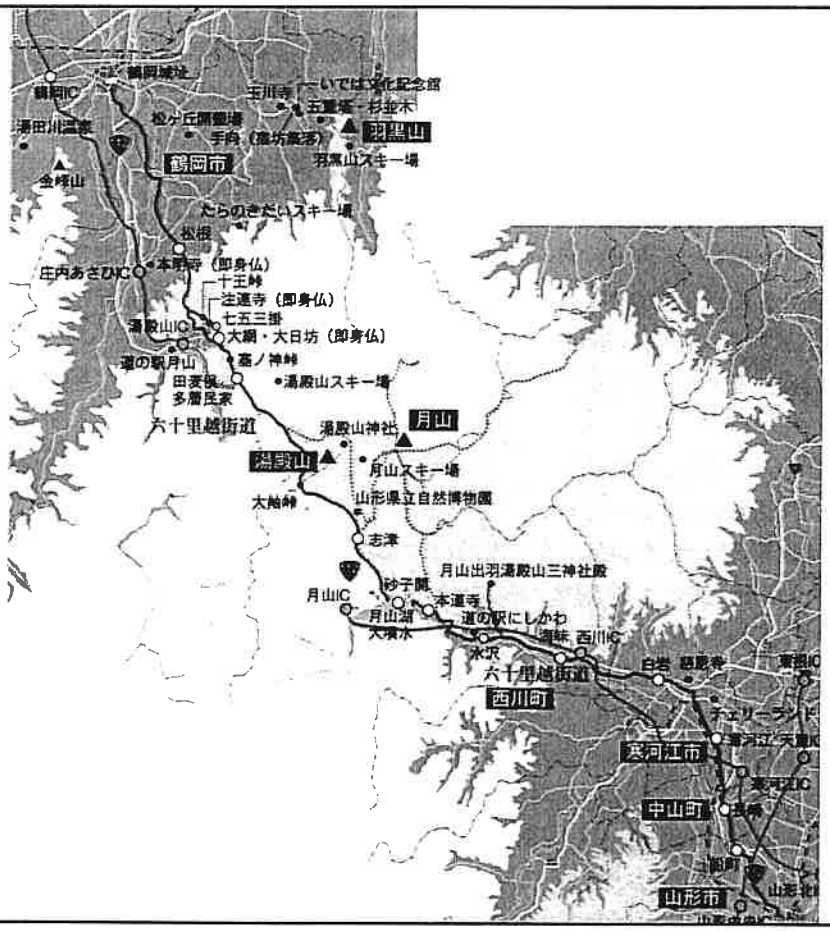
鄭　稼棋
鹿屋体育大学

鹿屋体育大学の鄭です。よろしくお願いします。今日は，六十里越街道と身体について発表したいと思います。まずは，今日の発表概要です。第一番目に，六十里越街道の歴史，続いて本研究の研究目的と研究方法を紹介して，それから六十里越街道の身体をめぐる地元の住民と観光客の二つの視点から分析し，最後に結論を述べます。

六十里越街道は山形県にある出羽三山，つまり月山，湯殿山，羽黒山へ通じる「信仰の道」です。その道路は山形市内から中山町，寒河江市，西川町，最後は鶴岡市まで至ります。出羽三山はとても重要な信仰の聖地です。昔から信仰者は常に自然への尊敬，あるいは祖霊信仰を持って，全て白い服装のままで山の上まで歩いて，神社に参拝するという形式をとっていました。

続きまして，この街道の歴史です。この街道は，平安時代に信仰者が出羽三山まで行く際に，宿場や茶屋，番所などがあったとても重要なところです。ただし明治時代以降は，自動車などが普及した影響もあり，現在は国道になっており，国道112号線と呼ばれています。この赤い線（紙面では太い線），西川町のところから上までの山側に

スライド1




『出羽三山・湯殿山への道（山形県歴史の道）六十里越街道にかかわる歴史と文化』伊藤武著

は，国道だけではなく古道も残っており，いくつかの史跡も残されています（スライド1参照）。

また，2012年に出羽三山は国の重要文化財に指定され，山形県にとって重要な観光資源となっています。六十里越街道の名前の由来は，戦国時代末期，六十里坂を越えるという意味で，その計算方法には，いくつかの言い伝えがあります。どちらにしても今の国道112号線の長さとは一致しないと言われています。本発表は六十里越街道を対象にして，信者と観光客の身体観を明らかにすることが目的です。

続きまして，六十里越街道と身体について述べたいと思います。まずは，事例一です。ここで紹介したいのは，西川町における湯殿山への草鞋奉納儀式です。それを主催している団体は，六十里越街道保存推進委員会と地元の志津温泉旅館組合というグループです。開催のきっかけは，2011年に起きた震災の復興祈願が目的でした。その地域は，山形市内（スライド1の最下部）から一番上までのちょうど真ん中くらいです。江戸時代からとても重要な宿場ということです。現在は，民宿が10軒くらいがあります。写真1は築400年になる仙台屋往時の建物です。次の写真2（1とともに志津温泉仙台屋の提供）は現在の状況です。

その開催日は，湯殿山の開山祭の前後です。奉納日は5月31日に設定しています。翌日の6月1日は湯殿山の開山祭になるので，前日に奉納していました。ただ，31日が土曜日や日曜日と重なった場合は，旅館業が忙しいため奉納日を前倒しにします。2016年からは山形大学の学生も一緒に参加するようになりました。その準備の流れは10日くらい前に草鞋を作って，前日にはリハーサルを行います。当日は，7時から志津温泉街内を神輿を担いで一周まわります。その後，車で15分くらいかけて本道寺というところに移動し，そこで儀式を行い，湯殿山に移動します。そして，最後に参加者全員で精進料理を食べます。

写真3は，草鞋づくりの様子です。前日，山形大学の学生を集めて練習しているところです。写真4は当日の7時に地元の人と山形大学の学生が集合した写真です。その山形大学の学生は，スポーツシューズ，スニーカー姿でしたが，地元の人は足袋を着用していました。

繰り返しになりますが，当日は神社にお参りして，草履を奉納して，最後に精進料理を食べます。

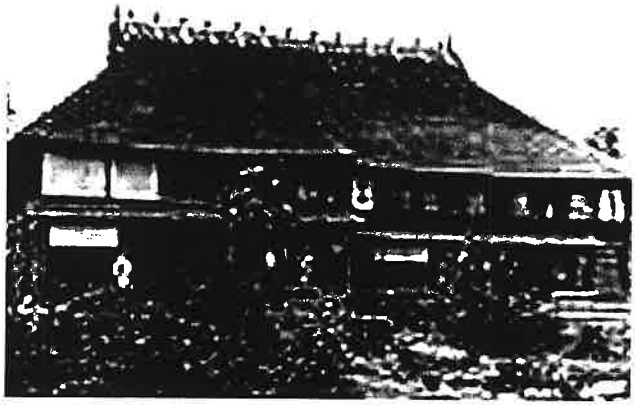


写真1（提供：仙台屋）

写真2（提供：仙台屋）

写真3

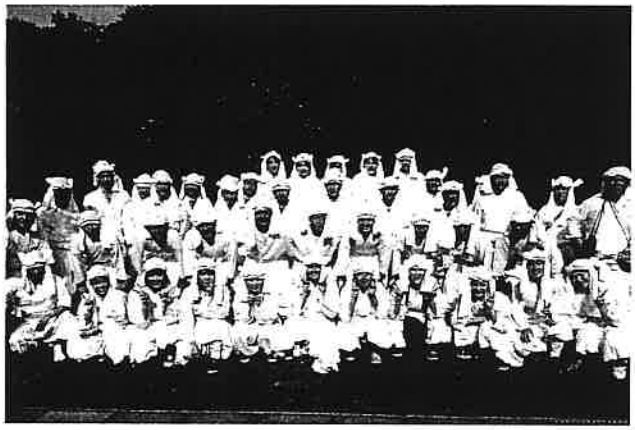
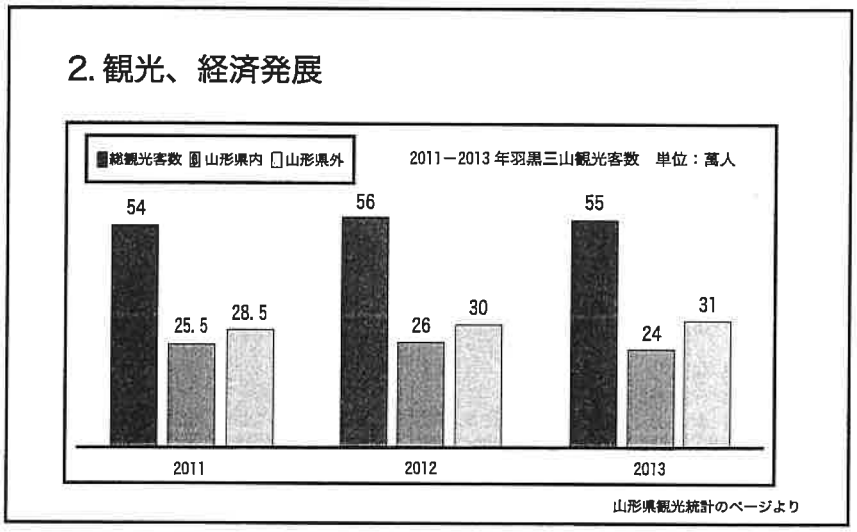


写真 4（撮影：志田）

しかし，精進料理とはいっても魚が入っており，完全な精進料理とは言えません。このようなことから見ても，地元の人にとって六十里越街道は宗教的な意味だけではなく，健康とかレジャーという意味も持っていると思われます。その街道には，羽黒山まで 2400 段くらいの階段がありますが，下から一番上まで歩いて行くと，認定カードがもらえます。毎年約 55 万人くらいのたくさんの人が羽黒三山に観光に来ますが，それは山形県内だけにとどまらず，県外からもです（スライド 2 参照）。さきほど話をした志津温泉というところは，冬の時期はあまりお客さんが来ないため，地元の人は雪を利用して，昔の宿場を再現するようになりました。その結果，観光客も増えました。そこでは雪を利用して昔の歴史を再現しています（スライド 3 参照）。

まとめますと，これらの行事を行うことによって，地域のアイデンティティーが高まります。つまり儀式とかイベントを通して，町のみんなが集まり，共通の目標を持つようになり，共感と一体感を感じるようになります。そして，神社まで歩いて行くことによって，本当に神様が町を守っていると実感できるようになります。以前，その歴史について聞いたことはありますが，実際にイベントに参加することによって地元の文化を再認識することができるようになったということです。さらに，そこには宗教的な機能だけではなく，観光とかレジャーの機能もあるとものと思われます。

続きまして，観光客の身体観について話したいと思います。現在は，いろいろなツアーなどを実施しています。例えば，六十里越を歩いていくとか，そば食べ放題などのツアーです。そこには二種類があります。一つは，全て白の衣装で参加するもので，宗教的な意




スライド 2

スライド 3

味を持っているものです。もう一つは歩きやすい自分の自由な服装で参加するツアーです。例えば，ハイキングとか山登りというツアーがあります（スライド4）。

私が昨年の1月に歩いてみた実例をお話ししましょう。私たちは朝の6時に山形市を出発して，4時間くらいで西川町役場まで歩きました。最初の目的地は，志津温泉までだったのですが，行き違いもあり，途中で断念しました。実際に私たちが国道沿いを歩いてみて感じたことは，人が歩ける場所が狭いのに対して車が多くて危険だったということです。

あさひむら観光協会ホームページより転載

スライド4

昔の様子を体験することはできたのですが，市内は完全に現代的になり，聖地巡礼と宗教的な感覚が薄くなってしまった感は否めません。しかしながら，文化的な遺産や歴史的な建物が残っていることには，観光的魅力がまだまだ残っていると思いました。参加者とか季節に関わらず，自然体験と聖地巡りという意味では，誰でも参加できるイベントだと感じました。

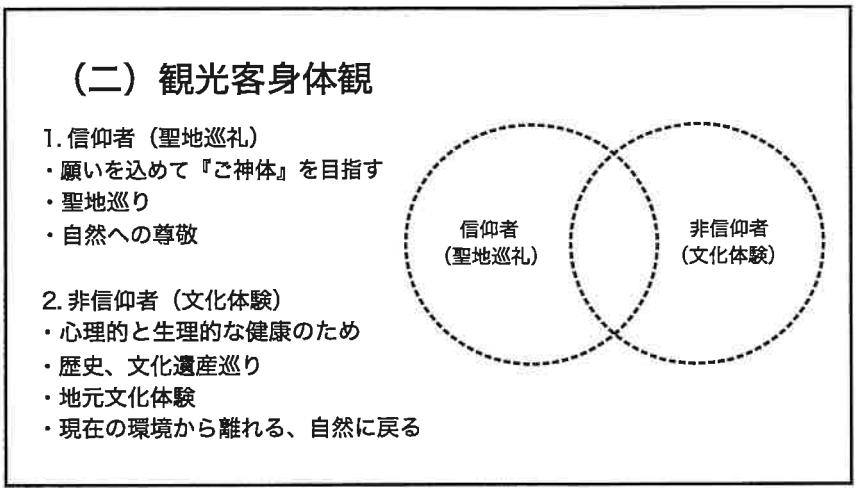
スライド5

結論です。まず地元の住民と信仰者の身体観についてです。彼らは実際には，神様にお祈りしたいことがあれば神社に行きますが，実際には昔みたいに下から山頂まで歩いては行きません。ただこのようなイベントを通じて，地域と文化を再認識するものと思われます。それは，文化の保存と伝承，そして新たな地域文化を作ることになります。それは，自然の恵みと神様への感謝を持ち続けることにも通じるものです。また，こうした聖地を観光化することにより，地方の活性化と経済の発展を促すことにも繋がると思われます。さらに，ハイキングや自然体験などのイベントを開催することによって，参加者の健康促進にも寄与するものと思われます。

最後ですが，観光客の身体観について話します（スライド5）。筆者は，信仰者と宗教的ではない人の両方の視点から見た方がよいと考えています。信仰者は，宗教的な意味を持って神社に行きます。また一方，信仰者ではない人は，文化体験がメインだと思われます。例えば，地元の文化体験とか歴史的文化遺産を見学することです。ただ，二つを明確に分けることはできません。地元の人が神社に行くときは歩いて行きますが，そこには

レジャーとか健康のためとかいう目的も持っていると思います。しかしながら信仰的でない人でも，文化体験が主な目的としても，神社に行けば行ったで神様にお祈りすることもあると思います。

最後です。今年の夏は西川町にある六十里越街道でマラソン大会が開催されることになりました。さきほど話した2400段の石の階段を含んだコースを設定しているそうです（スライド6）。今後は，こういった研究もおもしろいと思っています。単にスポーツの視点からだけ見るのではなく，宗教的な視点からの分析も必要と思われます。




スライド6


**【参考文献】**

山形県鶴岡市あさひむら観光協会（2016）出羽の古道六十里越街道の歴史

山形県西村山郡西川町役場（2010）NETWOK にしかわ 2009年平成21年1月号

国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所（1991）六十里越街道の歴史

財団法人東北産業活性化センター（2009）六十里越街道でつながる広域連携・交流促進プロジェクト　平成20年度調査報告書（本編）

山形県教育委員会（1980）山形県歴史の道調査報告書　六十里越街道　2-3　山形

月山志津温泉雪旅籠の灯り公式ホームページ

岩鼻通明（1983）出羽三山をめぐる山岳宗教集落　地理学評論56巻（1983）8号


# シンポジウム討論内容

## 1. シンポジスト間の意見交換

**石井**:鄭先生ありがとうございました。それでは，それぞれパネリストの先生方のお話が終了したところで，まずパネリストの間で何かもうちょっと詳しく言ってくれないか，この部分もう少し説明してほしいとか，その点についてはほかに何か研究がないのかとか，そんなことをお互いに何かございますか。まずは，そこから。

**瀬戸**：それでは，瀬戸から寺内先生にお伺いいたします。四国遍路の歴史に関しまして伺いたいのですが，遍路へ訪れる人々は，各々異なる願いを携えて四国に来るかと思います。もちろん，一重にはお答えできないことは重々承知しておりますが，本日のお話にございましたように，現在では仏様への祈願という側面が少し弱まり，（いただいたハンドアウトの両丸括弧7の「生まれかわる」というところでいえば）「新しい自分に出会うため」「自分が今まで生きてきたことを超えていく」のような人々が多いように思えます。彼らは，「新しい自分になっても

う一回生きていこう！」のように，まさに生まれ変わるために四国に来ることになるかと思います。その一方で，そもそも一般的な修業とは，今までの人生の延長線上にて「今の自分を良くするため」の行かとも思います。そこでお伺いしたいのは，四国遍路の傾向としては①自分を良くしていく，②生まれ変わる，どちらの方が多い感じなのでしょうか。

**寺内**：結論から言いますと，後者（生まれ変わる）の方ですね。これは四国遍路に限らず，巡礼一般について言われていることです。たとえば，富士山を崇拝する富士信仰，今日出てきた出羽三山もそうです。長距離を歩いて宗教的な空間に入り，そしてそこから戻ることによって新しい自分に生まれ変わる。そういうことは，日本・世界の巡礼一般について言えることです。ですので，どちらかというと後者に近いかと思います。

**瀬戸**：ありがとうございます。

**寺内**：では，私の方からお二人にお伺いしたいことがあります。今日はスポーツ人類学会ということで，スポーツに絡めてお聞きします。こういう身体を使うことは，どうしても話がスポーツという方向になるわけですが，お二人の話を聞くと，スポーツにいかないようにしているお話とスポーツにいくようにしているお話が出てきたかと思います。

ちなみに，ご存知の方もおられると思いますが，四国遍路の場合は，納経帳といって，88か所の納経印，簡単に言うと御朱印ですが，それをお寺ごとに行って書いてもらいます。今は「御朱印ガール」と言って，神社とかお寺の朱印を集めることが流行っていますが，最近は四国遍路もお参りよりも納経印を集めることがもっぱら目的になって，それを一種のスタンプラリーとしてする人もいなくはありません。札所のご住職などはそういうことを非常に嫌います。一種スポーツ感覚のお遍路さんというものも出てきていますが，四国の場合は，そういうことはやや否定的に捉えられる傾向が強いようです。

四国遍路というのは，弘法大師信仰，霊的な空間，スピリチュアルなものなので，スタンプラリー的なものはよろしくないとして，どちらかというと否定的に捉えられています。ところが，今のお二人のお話では西大寺の会陽の方はスポーツになることを避けようという傾向が出ていると思いますが，出羽三山のお話では，マラソン大会や階段登りもあって，むしろスポーツによってそれを盛り上げようとしていると思われます。どうしてそういう違いがあるのか，ちょっとお話しを伺えたらと思います。

**瀬戸**：ありがとうございます。今お話しいただいたことは，興味深いですが，非常に難しいところとして，たぶん見世物というか，皆さんが注目してくれること自体は悪いことではない。ただ一方で，見る側が存在した瞬間に，見世物になる時に，たとえば「わかりやすく」とか「おもしろく」とかいう要素が付加されてしまいます。そうすると，本来の意味とか価値みたいなものがどんどん変わってしまうことがありまして，「観光化」やそれに付随する「スポーツ化」により逆に衰退してしまった伝統文化もありますので，そこの舵の取り方が難しいのかと思います。

一般的にスポーツというと，オリンピックとか世界選手権が行われているような，世界規模で行われているスポーツということになります。これは世界基準の公平，公正，フェアプレーがそのベースにあり，また平等が保証された空間で人々が楽しめるコンペティションということになり，それはすなわち「西洋の価値」に起因するものです。たとえば，そのような枠組みにおけるスポーツに宝木争奪戦を組み込んで

くとすれば，「わかりやすくルールを明文化してほしい」とか「時間を決めてほしい」とか，「お金出してきたのだから審判とか決めてもっと明快にしてほしい」とかいろいろな外からのニーズが生まれます。それは一方で新たな会陽の価値の発現とも言えるかもしれませんが，このように新たな付加価値が導入された時に，西大寺観音院を中心に守ってきた本来の価値体系みたいなものと相いれないところが当然出てきてしまうのではないかと考えています。

もちろん見世物としてわかりやすく，スポーツ的要素がそこに付加されること自体は悪いことではありません。しかしながら，そこで完全に（西洋の価値としての）スポーツへシフトしてしまった瞬間に会陽文化は消えてしまうのではないかとも考えています。西大寺の人達はたぶんそれをきちんと理解しているかと思います。たとえば宝木争奪戦に際し，本堂の正面に桟敷席が用意されていて一席5000円で販売されていたり，地元のケーブルテレビが毎年争奪戦を生中継していたり現代の価値を内包しながら，一方でそれは，文化の根本にあるものを守るためのその仕掛けという領域を出ないようにきちんと枠組みが守られているように思います。したがって，本来的には，西大寺の会陽に関わる皆さんはたぶん一般的に言われる「スポーツ化」というものへは否定的であろうと思っています。

**鄭**：私の事例としては，たぶんそもそも宗教的な意味が薄いので，例えば「マラソン大会」とか「階段上りの大会」とかは観光客をたくさん呼べるような仕組みを作り，にぎやかな雰囲気を作るための仕組みを積極的に作っているのではないかと考えています。

逆に寺内先生に聞きたいのは，四国遍路においては，私が紹介した事例のように，マラソン大会のようなものを開催する可能性はないのでしょうか。

**寺内**：現代の絡みでいうと，スポーツ化することによるメリットとデメリットを考えているのではないかと思います。出羽三山ではスポーツ化する方のメリットが大きいと考えてやっておられるのでしょうが，西大寺とか四国遍路ではデメリットの方が大きいと考えているのではないでしょうか。

ちなみに，世界遺産にも登録されて有名な和歌山県の熊野古道というのがあります。平安時代以来1000年以上続いている熊野詣の古道ですが，そこでマラソン大会のようなものが開かれた時，非常に不評であったという話を聞いています。古道を静かに歩く雰囲気が壊されたという意味で，問題化されたようです。

おそらく同じようなことは四国遍路でも起きる可能性はあると思います。もし遍路道でマラソン大会とかをすると，皆さんかなり批判的な意見，静かにスピリチュアルな道を歩いているのに，そこをマラソンランナーが駆けるとはなんだ，というような声が出てきそうです。そういうこともあって，今のところは実現されていない，それが実情かなと思います。

**石井**：他にご質問ございますか。

**寺内**：ついでですので，私が聞きたいことを言いますと，我々三人に共通することは，やはり観光ということですね。あるいは経済的効果と言ってもいいですが，やはり現代の宗教やスポーツにはどうしてもこれが前面に出てくる，出てこざるを得ないというのが，現代の状況だと思います。したがって，四国遍路でも，というか巡礼そのものが観光なのかあるいは宗教なのか，古くから議論があり，せめぎあいがあるわけですが，四国遍路の場合は，両方の側面があると言われています。

四国遍路の場合，すでに江戸時代から，物見遊山でお遍路をする人もいれば，純粋に宗教的

な気持ちで巡る人もいました。今の四国遍路でも，乗用車やバスでまわっている人は，もちろん純粋に宗教的な気持ちでまわっている人もいますが，やはり観光的な側面は多くの方がお持ちかと思います。私は団体バスで札所を巡ったことがあるのですが，お寺のなかでは皆さん敬虔に般若心経をとなえておられるのですが，バスが一旦道の駅やお土産屋さんに止まると，一斉に買い物に行かれます。これは決して矛盾するものではなくて，四国遍路の場合は観光と宗教が両立していると思います。ですから，そういう宗教と観光は切り離されるものではないのですが，それぞれのところでどういう受け止め方をされているのか，お聞きしたいと思います。

**瀬戸**：たぶん観光客の方にたくさん足を運んでいただくこと自体は否定されることではなくて，ただ見ていただく文化現象が本来的に「当事者達が護ろうとしているものである」ということが重要なところであって，それを観光が故に変えることになってしまうと，受け入れる空間では本意でないかと思います。それで，西大寺の会陽に関していえば，先ほどお話ししましたように桟敷席が出来たり，テレビの中継があったり，外国の人など外部の方も参加できる形を取っていて，むしろ外に開かれていると言えば，開かれている。宝木の投下が22時に早まった，2時間早まったことによって24時だと参加できなかった人が参加できるようになったというようなこともあり，そういう意味ではプラスに働いているところもあるのかなと思います。

しかし，参加者に求められるもの，それから西大寺側求めるもの。それは結局，宝木争奪戦を大々的に拡張することではなく，宝木を大切に思い，それを授かるありがたさ（価値）を共有できる環境を作れるかということになるのではないでしょうか。したがって，たくさんの方が遠方から参集しても，宝木を獲ったら「優勝だとか一位だとか，俺が一番強かったとか凄かった」という，チャンピオンスポーツみたいになってしまったら，その瞬間にこの文化は消えてしまうと思います。そのために，外に拓き乍ら，如何に自分たちの価値を護っていくか，これが難しいところではありますが，これこそが，伝統文化の観光化やスポーツ化において一番重要なところかと思っています。

**鄭**：伝統文化と観光のでバランスをいかにうまくとるかという問題ですが，私はそれは，我々研究者が判断するものではなくて，地元の人が自分達で相談して決めることかなと思っています。さっき皆様にごらんいただきました精進料理は，観光客に合わせてお魚もや肉が入ることになりました。でも，地元の人は，もしそのようにしなければ人が集まらず，経済的に大きな問題となってきますので，私たちが正しいとか正しくないとか，ちょっと判断するのは難しいかなと思っています。

## 2. フロアとの意見交換

**石井**：そうしましたら，ここであと残りが25分くらいです。フロアの方から，何かこれはぜひ聞いてみたいとか，これをもうちょっとわかりやすく話してくれないかということがありましたら，挙手にてお願いいたします。

**相原**：興味深いお話をありがとうございました。京都大学の相原と申します。特に寺内先生にお聞きしたいのですけど，今回の発表ではあまり触れられなかったんですけども，四国の遍路と言えば，やはり弘法大師の修業を追体験するという側面もおそらくあると思うんですね。その点，瀬戸先生とか鄭先生のどちらかというと参加型の，参加する身体ということは，もう一つ別の追体験というその要素が入っていると私は思うのですけど，今回あまり触れられなかった

ので，その辺りを何かお教えいただけたらと最近の傾向も含めて，お教えいただけたらと思います。よろしくお願いいします。

**寺内**：今いわれたように，四国遍路の一つの要素として，かつて弘法大師が修行した道を追体験する，お大師さんと同じ道を歩く，そういう要素があります。それで，何でしたかね。

**相原**：追体験という要素が現代にも，遍路に参加している人たちはどういうふうに考えているのかということです。

**寺内**：追体験という意識はさほどないと思いますが，四国遍路の場合「同行二人」と言って，お遍路さんは常にお大師さんと一緒に歩いているのだという意識はあります。お遍路さんの場合，杖を持つわけですけど，杖がお大師さんの身代わりであると考えます。だから，お遍路さんは杖を非常に大切にして，宿屋さんに泊まる時はまず自分の足を洗う前に杖を洗う。そして，杖を必ず部屋のなかに持って行って，床の間に置きます。それはお大師さんを大事にするという考えですね。

お大師さんの追体験をするというよりも，むしろ今はお大師さんと一緒に歩いているんだ，お遍路さんはお大師さんに守られているんだという，そういう意識を皆さん持っておられます。疲れた時はお大師さんが助けてくれるような気がするという意識は，そういうところから生まれてくると思います。四国遍路の場合は，強弱はありますが，何らかの形でそういう弘法大師信仰と絡み合いながら皆さん巡っておられる。もちろん，スポーツとしてやっている方は，それは関係ないとされるでしょうが，大半の方は大師信仰をもってまわっておられるところはあります。

**相原**：ありがとうございます。

**石井**：他に質問等ありましたら。

**岩瀬**：今日はありがとうございました。首都大学東京の岩瀬と申します。さきほど，スペインカタルーニャの人間の塔という発表をしたんですけれども，わたしも塔のなかに入っていて，今日寺内先生がおっしゃっていた現代的な修行で得られる七つというものを同じように感じる経験をしており，やはり共通するところがあるのかなと考えながらお話を聞いていました。寺内先生と瀬戸先生に一つずつ教えていただきたいのですが，聞き逃してしまったかもしれません。

まず，寺内先生は，お接待の部分で，歩いていて何か親切なことをされる時にありがたいというお話をされておりましたが，お接待をする側のおばさんたちにも同じように弘法大師の信仰にまつわる何かそういうものがあるのか，信仰と身体という点で教えていただきたいです。

もう一つは，瀬戸先生へのご質問です。林グループのことなんですけれども，創設が35，6年ということですが，例えば寶木を取った，個人が得たものをグループのものにするという行為は，35年以上前，つまりは昔からそういうグループでそういうものを共有するものだったのか，それとも，先ほど林グループは名門とおっしゃっていましたけれども，割と最近になって行っているものなのか，つまり35年とか6年という短い活動なのか，その辺をちょっとお話しいただけたらと思います。

**寺内**：お接待をする側の論理，つまりなぜお接待をするのかについては，いろいろな研究がありますが，そこでは，頑張って歩いている人を助けたい，困っている人を助けようという気持ち，あるいは自分が四国遍路をまわれないので代わりにまわってください，そのお礼です，というような意味合いがあると言われています。ただ四国の場合，お接待は江戸時代以来400年以上続いている慣習なんですね。だから，そういう一般的な理由だけではなくて，四国の場合は独自の論理があります。

それは何かといいますと，さきほどお遍路さんというのはお大師さんと一緒にまわっているというように言いましたが，さらに進めていうと，四国ではお遍路さんイコールお大師さんという考えがあるわけです。ですから，お遍路さんにお接待をすることはお大師さんに物を差し上げる，つまり仏さまに物を差し上げる，そういう考えに繋がっていくわけです。

そう考えると，今でも神社やお寺に物を奉納しますが，なぜ奉納するかというと，いつかは何かそのご利益がいただけるのではないかと思うわけですね。今でもお寺さんに瓦とか何とかを寄付したりしますが，それは純粋な寄付であるとともに，仏の加護を願うという気持ちがあるわけですね。だからお接待というのは，見た目は一方的に物を差し上げるようにみえますが，実はギブアンドテイクの関係だと言われています。

つまり，お接待をする人は経済的サービスを与えるかわりに，お接待されるお遍路さんは何らかの宗教的サービス，簡単に言えばご利益を与えます。もちろんそんなものがあるかないかは別として，お接待をすることによっていつかはお大師さんからご利益と言いますか，いいことがあるんじゃないかと。そういったギブアンドテイクの関係がお接待にあります。だから，単なる一方的な奉仕ではなく，相互的な関係があるので，200年も300年続いています。そこがお接待の一種の秘密であろうと言われています。

ただあまりギブアンドテイクばかり強調すると，四国の人は利益目的でやっているのだということにもなりかねない。この話を学生にすると，お接待はそういうふうに意図的にやっているのかと受けとられたりします。もちろん，純粋な気持ちでしているのであって，そういうことはない，と言っています。それはともかく，経済的サービスに対する宗教的サービス，一種のギブアンドテイク，それがお接待にはあると言われています。

**瀬戸**：ありがとうございます。会陽においてグループというものを作って参加するのはそれほど古い形態ではないのでは，と思っています。西大寺会陽に関しては，先ほど申しあげたように授かった宝木は祝主さんにお渡ししてしまいます。そのかわりに先方からお礼を頂戴するということになります。私の言葉で言うと「御福」が巡っていくサイクルかな，と思っています。

岡山県内でも往時は百か所以上で会陽が行われていたと言われていますが，たとえば，現在会陽が実施されている鳥取東照宮の事例のように，祝主が存在しない形態もあり，その場合には取り主さんが宝木を授かることになります。そんな場合林グループでは，どなたかが物理的には宝木を授かるわけですが，それは個人の手柄とかではなく皆が協力して授かったというものとして理解していると私は考えています。したがって，宝木はリーダーの林さんのところに集積されていくことになります。宝木はみんなのものであって，それが手元にあるとかないとかは，あまり頓着しないという，むしろ個人がどうのというものを超えたところで御福を共有しているのかなって感じています。

一方で，会陽によっては，たとえば宝木にも本宝木と副宝木が存在していたり，いくつかのバリエーションがございます。基本的に，本宝木に関しては林さんのところに必ず収められて皆のものとして共有されています。一方で，これは美作安養寺の副寶木なのですが，これは僕が頂戴したんですね。「先生，研究のために持っていたらいいよ」と本来の取り主である林グループの奥山太一さんが下さったものです。全くもってありがたいことです。こういったケースのように個人のところに所蔵されることもあ

ります。しかし，先ほども述べましたように，林グループの場合は本宝木，副宝木の別なく，またどこに収められているかの別なく「御福は皆のものである」という考え方があるかと思います。本日お越しいただいている林グループの中野さんいかがでしょうか。林グループの皆さんは，たぶんそのように考えていると思うのです。中野さん，他になにかあればお願いします。

**中野**：その通りだと思います。会陽グループといってもいろんなタイプのがありますが，その中でも，やはり林グループというのは信仰・信心というのをすごく重んじて，そういうのを継承するために，普段からしっかり生活し，皆さんに伝える役割を意識していると思います。実は，結構宝木争奪戦って難しくって，僕自身も何回も出させていただきましたけど，宝木に触れたのは2～3回くらいのものです。ところで，実際に宝木を獲得した人の多くは普段から精進潔斎をされている場合が多く，我々は信仰・信心と宝木を授かれるか否かには関係があると感じておりますし，信じています。

そのために林グループでは平素から会陽や宝木争奪戦に関して文化を護ること，その環境を整えることに関して何かお役に立てればと考えております。たとえば，会陽に関する正しい知識をマスメディアなどを通して世の中にお伝えしたりとか，平素から寺院や町の清掃活動を行ったりなどの実践をしています。

**石井**：ありがとうございました。他に何かありますでしょうか。

**佐川**：金沢大学の佐川と申します。いろんな方面から話を興味深く聞かせていただきました。我々のスポーツ人類学という立場から，信仰と身体をテーマに挙げた時，どんな切り口で語るべきなのだろうか。語れるのだろうか。ということを悩みながら聞かせていただきました。そこにはいろんな切り口があるなと思いながら，私が感じたことを正直に述べさせていただきます。実は昨日までスリランカにいたんですね。スリランカという国では仏教徒が70％いて，外にはヒンドゥー教徒とイスラム教徒がいるんですね。そういう人たちが持っている信仰と身体と，日本人が感じる信仰，宗教というのは相当違うだろうと思います。一国多宗教の国では，このテーマはどう語られるだろうと思いました。

今回は，スポーツ人類学に集まった方が話されたテーマですが，もし日本の仏教のお寺さんたちが取り上げる信仰と身体だと，たぶん全然違う話になると思いました。寺内先生が最初のところで，時代区分を三つに分けてお話をされました。その時代ごとの身体も相当違っているんだろうなと。信仰と言った時に，お寺さんとその，88か所をまわっていらっしゃるお遍路さん達ですよね。お寺さんの語りと歩いている人の語り。それからその周りにいる人の語り。それぞれの立場での身体観もあるだろうと思いました。

それから，霊力とか修行とか福というものをどういうふうに身体を通して感じるのかなというようなことも感じました。そういう点で言うと，信仰ってどちらかというと価値であって見えないもの，頭のなかのものかもしれないけど，そういうものを見えるようにするために，身体というメディアがあるのでしょうか。福がすーっと落ちてきたり，降りてきたり，巡ってきたり。あるいは，修行で1200㎞を歩いた時に価値に出会うような，苦しみのなかで解放されるような，なんかそういうようなものかなと感じました。まとまりもない話をだらだらと言っているのでもうやめますけど，スポーツ人類学として身体を信仰と結び付けて考える時に，どんな切り口で語ったらいいのかなという思いを強く持たせてくれる，そういう話をしてくれたか

なと思います。とりとめもないことを言いました。ありがとうございました。

**瀬戸**：ありがとうございます。先生がおっしゃってくださったことは，まさにその通りだと思います。我々は，当該地域の文化文脈に根差したコンペティションというものが，地域の価値の再生産に関与する過程を「エスニックスポーツ」という研究視座で紐解きますが，私は自身の研究対象に触れるたびに，これはすばらしい分析概念だなと思っています。

ともすると，スポーツと一言で言ってしまうと，一般的に発想されるものとは「国際スポーツ」になりますが，これとは別に世界中の国や地域には多彩で豊かなスポーツ・身体文化があって，その価値を護るために身体を使ったり，コンペティションが行われたりしています。それは一見（国際）スポーツなんですけど，でもよく調べてみると一般的なスポーツとは別であることに気が付かされます。「スポーツという現象」をひとつの文化として文化人類学的に考えようとすると，やはりエスニックスポーツという概念がユーティリティな役割であるなと改めて気づかされます。

**寺内**：今回のテーマは「信仰と身体」ということですが，四国遍路はさまざまな方が研究されていて，今の四国遍路は信仰とか宗教とはちょっと違うのではないかということがよく言われます。実際，昭和の30年代くらいまでは，例えばハンセン病の人が病気が治るように，あるいは手や足の悪い人が治るように，かなり重いというか深刻な動機からまわっておられる方が多いです。

しかし，今は違います。弘法大師信仰というと信仰とか宗教的なものと思われがちですが，実は軽いんですよね。ですから，最近は宗教とは言わずに，今はやりの言葉で言えばスピリチュアル，こういう言葉がよく使われます。四国遍路は宗教かと言われたら，そこまでは重くはない，深刻ではない。それが実情ではないかと思います。例えば，今は若い人の間でパワースポットめぐりというのが流行っています。また御朱印を集めている御朱印ガールもいますが，そういう人びとにあなたは宗教を信仰していますかと聞くと，おそらく否定されると思います。しかし，そういうものに不思議な魅力を感じて，パワースポットめぐり，あるいは御朱印ガールと呼ばれる人がいるわけですね。ある意味，四国遍路もそれと近いところに今は位置するのではないかと思います。

ですから，深刻な宗教的な理由でまわっている人は本当に少ないと思います。かといって，ただ歩くだけなら，ハイキング，トレッキングと同じになりますが，やっぱりそれとは違うんですね。霊的なスピリチュアルなものがあるからこそ四国遍路なんですね。だから，トレッキングでもなければハイキングでもない。かといって深刻な巡礼でもない。その中間に今の四国遍路は位置しているかなと思います。以上補足です。

**石井**：まだまだ質問をしたい方もいるかと思いますし，まだこれ本当はテーマを設定するときにちょっと重いテーマではありました。スポーツ人類学会で「信仰と身体」というのを取り上げるというのは最初どうかなと思ったんですけども，もうどうにかなると，やっちゃえということで，お二人にお願いして，半ば，実は寺内先生にも半ば無理やりご登壇いただいたみたいなところがあります。しかしですね，今回の我々の一つの試みなので，ちょっと大目に見ていただいて，またこういう信仰と身体というような類似したテーマで，またどこかで議論をしていけたら良いんじゃないかと思います。

今日は日本の事例ということでしたので，佐川先生の先ほどのご意見のように，例えば，主

力の宗教圏というところで，信仰と身体ということで，何かスポーツにそれが刻印されていることはないかとかですね。また，他の事例をご存知の方とか，最近そういうのをやり始めたということがあれば，近い将来，このような機会を実現できればいいんじゃないかなということが，司会の感想でございます。

先ほど言いましたように三人の先生方には重いテーマに挑んでいただき，本当にありがとうございました。感謝を申し上げたいと思います。これにて時間が過ぎましたので，シンポジウムを閉じさせていただきたいと思います。